

「待ち行列理論とその応用： 未来への展望」シンポジウムルポ



高野正次 (NTT サービスインテグレーション基盤研究所)

OR 学会待ち行列研究部会が母体となって開催している毎年恒例のシンポジウムが、本年1月21日から23日まで名古屋能楽堂会議室において開催された。初日は低気圧が接近し1月にはめずらしい激しい雨にみまわれ、交通機関が一時マヒするほどで、参加者にとってあいにくの天候となった。しかしながら、会場は、なるほど能楽堂というだけに、建物の造りや装飾、能面の展示など能文化をただしく伝承するための施設であり、ときおり能楽の音が静かにもれ聞こえてくるなど、会場のもつ特別な雰囲気から、雨のうっとうしい気分を自然に解消することができた。

今年のシンポジウムのテーマは、「待ち行列理論とその応用：未来への展望」と題され、参加者数は80名を超え、発表件数36件（ペーパーセッションを含む）の例年に劣らない陣容で行われた。

発表内容は多岐に渡ったが、待ち行列の理論よりの内容がおおよそ半分で、残りの半分を通信関連と一般確率モデルによるアプローチが分け合うような構成となっており、各発表に対して非常に活発な質疑応答や議論が交わされて、いつもながら内容の濃いシンポジウムとなった。

概観として、理論的な発表では待ち行列ネットワークやパッチ到着というような古典的な枠組みの中での、粛々とした成果・進捗の報告とともに、subexponential という耳新しい性質を議論するものがいくつか見られた。

また、通信への応用をテーマとする発表には、移動体・無線通信を対象とする研究、インターネットやTCP/IPに関わるいろいろな検討、もっと具体的に、WEBアプリケーションや、MPEG2のような映像ストリームに関連する問題を扱うものなどがあったが、MPLSやWDM、IMT-2000というような最新技術との関連や動向をもとに説明されたため、参加者の興味を引いていた。

さらに、一般の確率モデル・アプローチによる研究の中には、コンピュータウィルスの撃退問題、Eコマ



閉会の挨拶 逆瀬川実行委員長

ースサイトのWEBデザイン評価法や混雑した電車の乗降客行動シミュレーションといった、参加者の素直な好奇心をかきたてるおもしろい内容のものがいくつかあった。特に、後者の発表では、電車の乗降時をシミュレーションしたコンピュータグラフィックスがスクリーンに映し出されて好評であった。これは、乗客が空席に座ろうとして移動したり、視線が変わらないように体の向きを変えたり、よく工夫されたシミュレーションであったが、押し合いへし合いしてギュギュ詰めになる乗降客の動きがこっけいだったためであろう。

特別講演は、Matrix-analytic の分野で非常に著名なベルギー・ブリュッセル自由大学の Guy Latouche 氏（東京工業大学客員教授）によるもので、制御系の応用でよく知られている代数リッカチ方程式の解へのマルコフ連鎖によるアプローチについてのお話をいただいた。

閉会時には、逆瀬川実行委員長（早稲田大学）より、開催の労をとっていただいた名古屋工業大学の久野勝久氏、中出康一氏、同大学の学生の皆様に対して感謝とねぎらいのことばがあり、「来年もこの能楽堂にしましょう。」というユーモラスな一言で幕を閉じた。